

## 東歌の場の構造(二)

渡 部 和 雄

### 一

山上臣憶良の大唐にありし時に、本郷を憶ひて作れる歌

六三 いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

日本への帰心を歌ったこの一首は、その内容から見て、いよいよ中国を後にする時、中国人との惜別の宴において歌われたものと思われる。(『山上憶良 人と作品』)

というのは中西進氏であるが、この〈饞宴の歌〉という理解の仕方が面白い。

十六年甲申の春の正月の五日に、諸卿大夫、安倍虫麻呂朝臣が家に集ひて宴する歌一首(作者不審)

一〇四一 我がやどの君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ

この「我がやどの君松の木に」という上二句は主人の挨拶のような趣をなしている。

「松」Ⅱ「待つ」については、東歌には、

三三六三 麻都之太須

三四三三 麻都等奈我伊波婆

などにみられ、

三四九五 蘇比能和可麻都

もそうかも知れない。

下句「降る雪の行きには行かじ」については類似的、

三四二三 上野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたりがある。

「降る雪の」を否定的に利用しているのはこの二例だけである。

六三の歌が宴歌であり、一〇四一が題詞で判るように宴歌であるとすれば、三四二三の東歌も正月五日あたりの、国庁、官人たちの宴歌と推測していいのかも知れない。

三五五七 悩ましけ人妻かもよ漕ぐ船の忘れは為なないや思ひ増すにで、「漕ぐ船の」「忘れは為なない」の関係は、卷十八、

水海に至りて遊覧する時に、おのおの懐を述べて作る歌

四〇四六 田辺史福麻呂

四〇四七 遊行女婦<sup>土師</sup>

四〇四八 垂姫の浦を漕ぐ舟楫間にも奈良の我家を忘れて思へや（大伴家持）

四〇四九 田辺史福麻呂

四〇五〇 久米広縄

四〇五一 大伴家持

一前の件の十五首の歌は、二十五日に作る。

とある。四〇四八の「漕ぐ船―楫間にも―忘れて思へや」に似ている。

この大伴家持の歌は宴席の歌である。とすれば三五五七の東歌も集団性の歌であろう。

卷十五

三七二五 我が背子しけだし罷らば白袴の袖を振らさね見つつ偲はむ

右の四首は、娘子、別れに臨みて作る歌は、送別儀札を基盤にしている。

防人歌に、

四四二三 足柄のみ坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも

右の一首、埼玉郡の上丁藤原部等母麻呂

四四二四 色深く背なが衣は染めましをみ坂給らばまさやかに見む

も送別儀の歌であろう。

四四二一 我が行きの息づくしかば足柄の峰這ほ雲を見とと偲はね

もその環境に入っていよう。してみれば東歌、

三五一五 見つつ偲はせ

三五一六 見つつ偲はも

三五十 見つつ偲はむ

が送別儀礼を基盤とした歌であることは大凡推測できる。

卷十五

新羅に遣はさえし使人等、別れを悲しびて贈答し、また海路にして情を働まして思ひを陳べ、并せて所に当りて誦ふ古歌

三五七八 武庫の浦の入江の洲鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし

三五七九 大船に妹乗るものあらませば羽ぐくみ持ちて行かましものとあれば、これは「贈答」で送別儀礼での歌のように理解できる。

所に当りて誦詠する古歌の（中）

三六〇三 青柳の枝伐り下ろしゆ種蒔きゆゆしき君に恋ひわたるかも

三六〇五 わたつみの海に出でたる飾磨川絶えむ日にこそ我が恋やまめの「右三首は恋の歌」とあるのは遣新羅使人（男集団）の誦詠歌である。

三六〇四は男側の歌で、要するにこれらは送別儀礼の歌のように存在している。形式性が個人の抒情を越えている。

卷十九

十月十二日に、左大弁紀飯磨朝臣の家にして宴せる歌三首

四二五七 手束弓手に取り持ちて朝獵に君は立たしぬ棚倉の野に

右の一首は、治卿船王の伝へ誦める、久迩の京都、時の歌 未詳作主也

四二五八 明日香川川門を清み後れ居て恋ふれば京いや遠そきぬ

右の一首は、左中弁中臣朝臣の伝へ誦める、古き京の時の歌なり

四二五九 十月時雨の常かわが背子が屋戸の黄葉散りぬべく見ゆ

右の一首は、少納言大伴宿祢家持、当時梨の黄葉を囑てこの歌を作れる

をみると、「当時」という云い方が「当所」という表現に似ている。題詞にみられるように、これらは「宴歌」で、伝誦歌で、それこそ間に合わせる事ができた。

『角川文庫 万葉集』に、この三首を「後の補入らしい。」という。各歌のよまれた場所がバラバラで、「宴せる歌」として、一ヶ所にまとめられたわけである。

四二五七は「君」に対しての挨拶の歌。本来は狩獵に出発する時の、儀礼の歌があつて、それへの反歌性を持つ短歌で、この場で相応しいものとは必ずしも思われない。

四二五八の「後れ居て恋ふれば」というのは送別儀礼の慣用句で、後に残る〈女側〉としての形の歌である。

宴歌というのは送別儀礼の形をもつていて、送別儀礼には男女という集団の形式がある。

四二五九だけが「屋戸の黄葉」を囑で作ったという家持の歌。いわば家持の抒情だけが儀礼形式を少し離れようとしている〈儀礼歌〉というわけである。この矛盾のようなものが、〈歌〉を対象化し、ここに「宴歌」としてまとめたいやうなものが、拡大すると大きく万葉集というものになるのだろう。万葉集は大きな「宴歌」集である。

### 卷十三

三二六〇 小治田の年魚道の水を聞なくそ人は汲むといふ時じくそ人は飲むといふ汲む人の間なきがごとく飲む人の時じきがごとく我妹子に我が恋ふくらは止む時もなし

### 反歌

三三六一 思ひ遣るすべのたづきも今はなし君に逢はずて年の経ぬれば

今案ふるに、この反歌に「君に逢はず」と謂へれば理に合はず、宜しく「妹に逢はず」と言ふべし。

三三八四 菅の根のねもころごろに我が思へる妹によりては言の忌みもなくありこそと斎瓮を斎ひ掘りすゑ竹玉を問  
なく貫き垂れ天地の神をそ我が祈むいたもすべなみ

今案ふるに「妹によりては」と言ふべからず。まさに「君により」と謂ふべし。なにそとならば、すなはち反歌  
に「君がまにまに」と云へればなり。

三三八五 たはちねの母にも告らず包めりし心はよしゑ 君がまにまに  
或本の歌に曰く

三二八六 玉たすき懸けぬ時なく我が思へる……

反歌

三二五七 天地の神を祈りて我が恋ふる……

或本の歌に曰く

三二五五 大船の思ひ頼みてさな葛……

右五首

三三一四 つぎねふ山背道を他夫の馬より行くに己夫し徒歩より行けば見るごとに音のみし泣かゆそと思ふに心し痛

したらちねの母が形見と我が持てるまそみ鏡に蜻蛉領布負ひ並め持ちて馬買へ我が背

反歌

三三一五 泉川渡り瀬深み我が背子が旅行き衣濡れひたむかも

或本の反歌に曰く

三三二六 まそ鏡持てれど我は駿なし君が徒歩よりなづみ行く見れば

三三二七 馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも我は二人行かむ

では或本のの反歌(三三二六、七)が、女―男の關係になっているが、三三二七は三三二四をうけ、女―男の形をなしている。

三三二八 ……妹の山背の山越えて行きし君

### 反歌

三三二九 ……君が来まさむ道の知らなく

三三三〇 ……求めそ我が来し恋ひてすべなみ

『全集』第四句「求めそ我が来し」とあるのによれば、作者〈女〉は夫のあとを追って、巨勢以遠まで行ったことになる。しかし別の場合の歌をここに挿入したとも考えられ、男の歌にみることもできる。歌謠的な歌には別々の作者の作を混ぜることは珍らしくない。

三三三一 ……紀伊へ行く君を何時とคาดหวัง

三三三二 門に居し郎子宇智に至るともいたくし恋ひは今帰り来む

は、第三者的な歌い方である。

### 東歌に、

三三三五 己が命をおほにな思ひそ庭に立ち笑ますがからに駒に逢ふもの  
という歌があつて、第三者性において似ている。

角川文庫『万葉集』に、

ここまで五組の問答は、前三組が男―女、後二組が女―男の問答。  
という。

講談社文庫『万葉集』では、

三三一七 男の答歌。

三三三二 門に坐し娘子は宇智に至るともいたくし恋ひば今還り来む

男の歌で以前四首の女歌と問答。

という。

## 二

この宴の歌が、送別歌、餞宴歌になる時は、男女の対応のようになるのが普通である。

大宰帥大伴卿が京に上りし後に、沙弥満誓、卿に贈る歌二首

五七二 まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつ居らむ

五七三 ぬばたまの黒髪変り白けても痛き恋には逢ふ時ありけり

について、角川文庫『万葉集』に、

女の恋歌めかして歌っている。

とあるのは、相手が「京に上りし後」のことであるから、形式だけが残されたものである。「君に後れてや」という



のは送別儀礼の場では、例えば防人歌では妻(女)の表現であった。「ぬばたまの黒髪変り白けても」も女の表現である。送る側は生活共同体的には女であった。

また生産共同体のなくなった所では、擬制的に遊女であったりした。

春三月、諸の卿大夫等の、難波に下る時の歌二首 并せて短歌

一七四七 白雲を竜田の山の滝の上の小桜の嶺に咲きををる桜の花は山高み風し止まねば春雨の繼ぎてし降ればほつ枝は散り過ぎにけり下枝に残れる花はしましくは散りなまがひそ草枕旅行く君が帰り来るまで

### 反歌

一七四八 我が行きは七日は過ぎじ竜田山ゆめこの花を風にな散らし  
とある、この長反歌の關係について、『全集』では、「長歌はここから引き返す見送りの者が詠んだ形であるが、この語(我が行き)は、反歌が旅に行く者の作であることを示す。贈歌に似せたものか。」  
という。送別儀礼の歌の形である。としたら、

一七四九 ……君がみ行きは今にしあるべし

### 反歌

一七五〇 暇あらばなづさひ渡り……

でも、反歌は旅行く側の答歌である可能性をも持てるところであろう。

五年戊辰に、難波の宮に幸する時に作る歌四首

九五〇 大君の境ひたまふと山守据ゑ守るといふ山に入らずはやまじ  
九五一 見わたせば近きものから岩隠りかがよふ玉を取らずはやまじ

九五二 韓衣着奈良の里の夫松に玉をし付けむよき人もがも

九五三 さを鹿の鳴くなる山を越え行かむ日だにや君がはた逢はずあらむ

右は、笠朝臣金村が歌の中に出づ。或は車持朝臣千年が作といふ。

『集成』に「この四首、難波の宮の宴席で、金村と千年が歌い交したためにこういう伝えがあるか。」という。送別儀礼が旅先の宴席に移した形である。一つの歌が二人の作者を持つている。九五三は残る女の歌の形を残している。その女は九五二によるに奈良の里にいるらしい。この四首は、夫々二首づつ、男女の相聞、送別儀礼様の歌になっている。

金村と千年の關係は、七二三年（文正）、養老七年癸亥の夏の五月に、吉野の離宮に幸する時に、笠朝臣金村が作る歌一首 并せて短歌

九〇六、反歌九〇八、九、九一〇、一、二とあり、

車持朝臣千年が作る歌一首 并せて短歌

九一三、反歌九一四

或本の反歌に曰はく 九一五、九一六と並んでいる。で、

九一七、反歌九一八、九、山部赤人

九二〇、反歌九二一、二、笠金村

九二三、反歌九二四、五、山部赤人

九二六、反歌九二七、山部赤人

九二八、反歌九二九、九三〇、笠金村

九三一、反歌九三二、車持千年

九三三、反歌九三四、山部赤人

九三五、反歌九三六、七、笠金村

九三八、反歌九三九、九四〇、一、山部赤人

九四二、反歌九四三、四、五、山部赤人

九五三 さ雄鹿の鳴くなる山を越え行かむ日だにや君がはた逢はざらむ  
の「君」が女からの形式であることは、

後れたる人の歌二首

一六八〇 あさもし紀伊へ行く君が真土山越ゆらむ今日を雨な降りそね

一六八一 後れ居て我が恋ひ居れば白雲のたなびく山を今日か越ゆらむ

などで推測でき、かつ右様の語句を持つ歌が送別の形式を示していることは先にも触れた。

大宰大監大伴宿祢百代ら、駅使に贈る歌二首（の中）

五六七 周防にある磐国山を越えむ日は手向けよくせよ荒しその道

には「荒しその道」（三八二）、「山を越ゆる日は」（三四〇二）の同・類句がある。後者の東歌は、

三四〇二 日の暮れに碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ

とあって、原則的には送別儀礼の歌であろう。

## 卷六

敏馬の浦を過ぐる時に、山部宿祢赤人が作る歌 并せて短歌

九四六 御食向ふ淡路の島に直向ふ敏馬の浦の沖辺には深海松採り浦みにはなのりそ刈る深海松の見まく欲しけどなのりそのおのが名惜しみ間使も遣らずて我れは生けりともなし

反歌一首

九四七 須磨の海女の塩焼き衣のなればか一日も君を忘れて思はむ

右は、作歌の年月いまだ詳らかにあらず。

ただし、類をもちての故に、この次に載す。

「なのりそ刈る」までを一応序として、そこから、

「深海松の見まく欲しけど」

「なのりそのおのが名惜しみ」

と対句、こうした一般的形式性は儀礼の歌であろう。この「なのりその」は三六二にも使用されている。

ここでは長歌・反歌の形で、旅の男と家に残る女の形になっている。

長反の形式が対応の形式であるとは儀礼歌の本来性であろうと思われる、いま送別儀礼における男女の在り方を、山部赤人が長反の形に示しているとも推測される。だからこれも基本的には旅における送別儀礼の歌を基礎に持つものである。

山部宿祢赤人が歌六首（の中）

三六〇 潮干なば玉藻刈りつめの家の妹が浜づと乞はば何を示さむ

三六一 秋風の寒き朝明を佐農の岡越ゆらむ君に衣貸さましを

三六二 みさご居る残みに生ふるなのりその名は告らしてよ親は知るとも

では、三六〇に「家の妹が」とあり、三六一に「越ゆらむ君は」とある。

という歌々も旅での儀礼、宴歌の性質を示しているようにし、三六二に「或本（三六三）」のあることも流布、一般性を示している。

高丘河内連が歌二首

一〇三八 故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひぞ我がせし

一〇三九 我が背子とふたりし居らば山高み里には月は照らずともよし

角川文庫『万葉集』に、

前歌に対して、古京奈良にいる女性の立場での歌。二首とも宴席歌であらう。  
という。

卷十一「問答」の部に、二八四五、

二八二五 玉敷ける家も何せむ八重むぐら覆へる小屋も妹と居りてば

という歌があつて、「ふたりし居らば」に対応するようにある。一〇三九も問答の原則の上に成立する歌であらう。

一〇三八、九は前者は男、後者は女の問答のように出来ている。

十六年甲申の春の正月の五日に、諸卿大夫、安倍虫麻呂朝臣が家に集ひて宴する歌一首、作者不審

旅の途中、宿泊地での宴も、送別の儀礼性を根底として表現される。

肥前の国の松浦の郡の狛島の亭に船泊りする夜に、遙かに海浪を望み、おのおのの旅の心を働まして作る歌七首

三六八一 帰り来て見むと思ひし我がやどの秋萩すすき散りにけむかも

右の一首は秦田麻呂

三六八二 天地の神を祈ひつつ我れ待たむ早来ませ君待たば苦しも

右の一首は娘子

三六八三 君を思ひ我が恋ひまきはあらたまの立つ月ごとに避くる日もあらじ

三六八四、五、六、七

角川文庫『万葉集』に、(三六八二)

宴に侍した遊行女婦。

という。この「娘子」は、君―妹の関係からは宴を構成しているだけで、直接的ではない。それで一層送別歌で典型的で、その基本形で、三六八三は「おのおの」の作である。

防人歌の中に、

四四一五 白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見てももや

右の一首、主帳荏原郡の物部歳徳

四四一六 草枕旅行く背なが丸寝せば家なる我は紐解かず寝む

右の一首、妻の棕椅部刀自売

男(歌なし)

四四一七 赤駒を山野にはかし捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ

右の一首、豊島郡の上丁棕椅部荒虫が妻の宇遲部黒女

四四一九 家ろには葦火焚けども住み良けを筑紫に至りて恋しけ思はも

右の一首、橘樹郡の上丁物部真根

四四二〇 草枕旅の丸寝の紐絶えば我が手と付けろこれの針持し

右の一首、妻の椋椅部弟女

四四二一 我が行きの息づくしかば足柄の峰這は雲を見と偲はね

右の一首、都筑郡の上丁服部於由

四四二二 我が背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝も

右の一首、妻の服部咎女

四四二三 足柄のみ坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも

右の一首、埼玉の郡の上丁藤原部等母麻呂

四四二四 色深く背なが衣は染めましをみ坂給らばまさやかに見む

右の一首、妻の物部刀自売

といった防人とその妻の唱和があるが、この最後の例を除いてはうまくかみ合っていない。『全注』に「この武蔵国の防人歌には夫婦の歌が四組あるが、そのうち三組まで内容的に噛み合わず、贈答歌という枠に入らない。」という。

この四四二三、四の前で、即ち四四二二で終る本があったらしいことから、

防人

四四一三 枕大刀腰に取り佩きまかなしき背ろがまき来む月の知らなく

右の一首、上丁那珂郡の桧前舍人石前が妻の大伴部真足女

から四四二三、四の原則的に夫婦の唱和歌は東国における送別儀礼の基盤によっていよう。

四四一五「伊弊奈流伊母乎」

四四一六「伊波奈流和札波」

の「イヘ」「イハ」の差異は、前者・防人が作った歌に対して、妻は従来あった歌を、形式に従って表現したのではないか。

四四一七「赤駒を山野にはかし」

は『全集』に、

この歌が詠まれた二月初めは放牧期ではなく、ここは夫を歩いて行かせるつらさから、ことさらに季節を無視して表現したのであらう。

という。〈季節を無視して〉というのは、村落一般性でということである。即ち〈山野にはかし〉が「徒歩ゆか遣らむ」の村落的一般感情であったということになる。〈山〉〈野〉の並列も同趣である。

「まかなしき」は『全注』に、

「宮に行く児をまかなしき」(4・五三二)、「置きて行かば妹はまかなし」(14・三五六七)などのように、マカナシも概して男性から女性に対して用いられることが多かったと思われる。ここはその例外であらう。

という指摘があつて興味深い。いわば女性が男性化していて、男女の集団という性を越える感覚ができている現象を示すものだらう。

三

卷三に、



志賀に幸す時に石上卿が作る歌

二八七 ここにして家やもいづち白雲のたなびく山を越えて来にけり

という歌があつて、いわゆる〈望郷歌〉。『集成』に、「白雲の……望郷歌の常套的表現」という。

望郷歌といつてみるからには、その基点である〈志賀に幸す時〉の送別儀礼歌に対応するように発想されているのかも知れない。その基点には「後れ居て」といった如き歌が存在していることになる。

東歌に、

三三五七 霞居る富士の山びに我が来なばいづち向きてか妹が嘆かむ

という歌がある。ここには「我が来なば」という仮定表現があつて、旅先が仮定されている。旅先で、その線上から、望郷歌が生まれると、それは送別儀礼歌を含むことになる。

〈後れ居て〉と〈我が来なば〉は対応的に存在し、それに望郷歌、例えば八八七が対応する。

態凝のためにその志を述ぶる歌に敬和する六首并せて序(の中)

八八七 たちちの母が目見ずておほほしくいづち向きてか我が別るらむ

態凝は旅の途中死ぬ。「我が別るらむ」はその〈死別〉のことである。家郷に向かつてか、死出の旅へか「いづち向きてか」といつているのだらう。そして、「母が目見ずて」と、つづいてよまれている、

八八九「家にありて」、八九〇「我を待たすらむ父母らはも」、八九一「父母を置きてや」などは、家郷での〈送別儀礼〉の歌を基盤にしているのではないか。

三四七四 植え竹の本さへ響み出でて去なばいづち向きてか妹が嘆かむ  
という歌い方も、その送別儀礼の表現であらう。

卷十二 悲別歌に、

三一八八 朝霞たなびく山を越えて去なば我れは恋ひむな逢はむ日までに

三一八九 あしひきの山は百重に隠すとも妹は忘れじ直に逢ふまでに

一云 (あしひきの山は百重に) 隠せども君を思はくやむ時もなし

三一九〇 雲居なる海山越えてい行きなば我れは恋ひむな後は逢ひぬとも  
と並んでいる。この悲別歌は、

三一八八—女の歌

三一八九—男の歌

一云 —女の歌

三一九〇—男の歌

という具合に並べられていて、上の句を類同している。

朝霞たなびく山を越えて去なば

雲居なる海山越えてい行きなば

あしひきの山は百重に隠すとも

一云 同

は仮定条件を表現していて、送別時の一般性、儀礼性を示していよう。東歌にも、

三四七七 東道の手児の呼坂越えて去なば我れは恋ひむな後は逢ひぬとも

とある。

三一八九と一云では下句で「妹」と「君」を対応させている。これは東歌の「或本」の在り様に似ている。東歌は卷十二の分類からは〈悲別歌〉に位置づけられる歌もあったわけである。

また、

三〇五六 妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くな又顧みむ 一云ただに逢ふまでに

も旅立ち時の歌であろう。東歌に、

三四二三 上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり

とあるのを既に公的な宴の歌とみたのであるが、「またかへり見む」を含めて旅立時の儀礼歌として使われたと推測してよいと思われる。

#### 卷四

##### 池辺王が宴誦歌

六二三 松の葉に月はゆつりぬ黄葉の過ぐれや君が逢はぬ夜ぞ多き

という歌がある。池辺王は大友皇子の孫。「松の葉に」は〈待つつの端に〉。「君」は男。あなたはまさか死んでしまつたわけでもあるまいに、逢いに来てくださいらない夜が重なること、という女の恋歌。「いかにも宴誦歌らしい」と『集成』にいう。男が歌っている。

連歌の「己能久礼能等伎由都利奈波」(三三五五)も似た趣きである。

娘子、佐伯宿祢赤麻呂に報へ贈る歌一首

六二七 我がたとまかむと思はむますらはをち水求め白髪生ひにけり

佐伯宿祢赤麻呂が和ふる歌一首

六二八 白髪生ふことは思はずをち水はかにもかくにも求めて行かむ  
では冒頭に男の贈歌がない。『集成』では「娘子」は「架空の遊行女婦か。」という。

宴席には男女がいたという原則、イメージがあつたのだろう。佐伯赤麻呂は六二七でその女をやっている。

「をち水求め 白髪生ひにたり」

「白髪生ふる……をち水は……求めて行かむ」

と対応している。

大伴四綱が宴席歌一首

六二九 何すとか使の来つる君をこそかにもかくにも待ちかてにすれ

「かにもかくにも求めて行かむ」(男)

「君をこそかにもかくにも待ちかてにすれ」(女)

佐伯宿祢赤麻呂が歌一首

六三〇 初花の散るべきものを人言の繁きによりてよどむころかも (男)

この形は宴席で〈宴誦歌〉を構成したものである。男女の恋歌の様相を表わしているし、送別儀礼の場だったら、送別の、男女の情が構成されるのであろう。

湯原王、娘子に贈る歌二首

六三一、六三二

娘子、報へ贈る歌二首

六三三、六三四

六三四 家にして見れど飽かぬを草枕旅にも妻とあるが羨しさ

この「娘子」は「遊行女婦か」と『集成』にいう。この題詞は先の六二七に似ている。

湯原王のまた贈る歌二首

六三五 草枕旅には妻は率たれどもくしげの内の玉こそ思ほゆれ

六三六 我が衣形見に奉るしきたへの枕をさけずまきてさ寝ませ

とみて行くと、遊行女婦であるものにも、〈妻同様の〉送別儀礼歌が可能であつたことがわかる。

娘子のまた報へ贈る歌一首

六三七 わが背子が形見の衣妻問ひに我が身は放けじ言問はずとも

は実の妻以上に情緒的でさえある。

六三八 湯原王

六三九 娘子

六四〇 湯原王

六四一 娘子

六四二 湯原王

我妹子に恋ひて乱れはくるべきに懸けて寄せむと我が恋ひそめし

で終る一連は、送別儀礼性を基礎にして、男女の恋歌の贈答ができてしまっている様相を示している。

「恋ひて乱れば」「我が恋ひそめし」は東歌に、

三三六〇 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめや

或本歌 —— 白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ  
と似た語句がみられる。

東歌が送別儀礼性を基にして、そこから発展した恋歌の性質を持つと考えられるかも知れない。

「宴席」「娘子」という、生活の次元から少し抜け出た所で、その構成された環境を基礎にして歌が作られている。  
一般の歌では、作歌によつて恋という形ができるだろうに、その逆に場（構成された環境）をおいてみれば恋の歌  
ができるようになる。

## 卷二十

二月に、式部大輔中臣清麻呂朝臣が宅にして宴する歌十首（の中）

四五〇四 うるはしと我が思ふ君はいや日異に來ませ我背子絶ゆる日なしに

右の一首は、主人中臣清麻呂朝臣

というのを単独で取り出してみたら、これは恋歌の中の、典型的恋歌とみられよう。

こう《完璧》に恋が造型できれば、実は恋にあきれることも簡単であり、人はもう一回、《恋》を探さなければなら  
ないだろう。

万葉の終り頃、恋もまたかく豊熟して、共に生命を終えることになるのだろう。

現象的にいって、形式化された《送別儀礼歌》では作者という同一人が男であり、女であり、あるいは送る者が送  
られる者であるという場合がある。

一七三〇 山科の石田の小野のははそ原見つか君が山道越ゆらむ

一七三一 山科の石田の社に幣置かばけだし我妹に直に逢はむかも

というのは、巻九、宇合卿が歌三首の中にある。巻九のこの辺は旅の歌であつて、その前提に立てば右様の送別儀礼歌ができたわけである。

異様なことが末期的には正常のようになる。

ひさかたの雨は降りしくなでしこがいや初花に恋しき我が背

我が背子がやどなる萩の花咲かむ秋の夕は我を偲はせ

などとあれば、既述の送別儀礼性の論理からは〈女の歌〉である。

右は、その送別儀礼という、原則的には男女の性質が保存されている防人歌とそうは離れていない時期の、大伴家持と大原今城の歌である。

四四四七 賄しつづ君が生ほせるなどしこが花のみ問はむ君ならなくに

右の一首は、左大臣が和ふる歌

四四四八 あぢさゐの八重咲くごとく八つ代にをいませ我が背子見つづ偲はむ

右の一首は、左大臣、味狭藍の花に寄せて詠む

四四四九 なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも

右の一首は、治部卿船王

四四五〇 我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲きは増すとも

四四五一 うるはしみあが思ふ君は石竹花が花に擬へて見れど飽かぬかも

右の二首は、兵部少輔大伴宿祢家持追ひて作る

みられるよう男達の恋人集団が成立していた。

二十三日、式部少丞大伴宿祢池主が宅に集ひて飲宴する歌二首

四四七五 初雪は千重に降りしけ恋ひしくの多かる我れは見つつ偲はむ

四四七六 奥山のしきみが花の名のごとやしくしく君に恋ひわたりなむ

右の二首は、兵部大丞大原真人今城

とみてくると、男女間の恋情表現が、男同志にも用いられていることがわかる。貴族的、文化的宴歌の中にそれが繁殖して行った。

日本文学のホモ性（同一感覚性）が形成されてくる基盤なのであろう。